

【vol.27】インターバルについて詳しく～その1～

こんにちは、大沼です。

ここ2回ほど、楽曲の key(キー)について解説していましたね。

これまで学んだ key の基本概念をまとめると、

- ・key とはその楽曲の基準となる1音(トータルセンター)と、音階(スケール)を表したものである。
- ・メジャーキーの場合は、そのトータルセンターをトニックとしたメジャースケール、マイナーキーの場合は、そのトータルセンターをトニックとしたマイナースケール、がそれぞれ基準となるスケールになる。
- ・楽曲はその key に対応したスケール(の構成音)で大半が構築されている。

と、この3つでした。

基本的な捉え方としては、上記3つのポイントだけで、key そのものの意味としては十分です。

この key の概念を基本にして、その上で、今まで学んできたスケール、コードの知識を組み合わせることにより、楽曲の分析の方法や、アドリブ、作曲、アレンジなどの手法を考えて行けるようになります。

それと、key の意味していることとして、ひとまず上の3つからはずしておいたんですが、key にはメジャーとマイナーがありますよね？

前の解説では、ざっくりと、

- ・メジャーキーは明るい雰囲気(音楽的な響き、感じ)のキー
- ・マイナーキーは暗い雰囲気(音楽的な響き、感じ)のキー

と説明していたと思います。

これはこれで正しいんですが、音楽理論の解説としては

ちょっと言葉が足り無すぎたりもします。

この辺りのちゃんとした説明は、もう少し後でやりますので、今は、

メジャーキー＝明るい、マイナーキー＝暗い

の捉え方でOKです。

まあ、正確な解説といっても、基本的な音楽理論は、

『(先に音、音楽があつて)それを聴くと、大多数の人はこう感じますよ』

ということ、後付けでまとめたものなので、メジャー＝明るい、
マイナー＝暗い、でも、とりあえずは大丈夫なのですが。

さて、keyの基礎について一段落したところで、今回は、タイトルの通り、
『インターバル(interval)』について詳しくやっていきましょう。

ここを理解していると、上級者が、

- ・なぜコードネームを見ただけでそのコードが押さえられるのか？
- ・なぜオリジナルのコードフォームを作れるのか？
- ・なぜ各スケールの違いがわかるのか？
- ・なぜアドリブなどで、その時鳴らして良い音とダメな音がわかるのか？

と、そういったことが理解できます。

インターバルについては vol.18 でも少し解説しましたが、
今回はその内容を詳しく学び直します。

もしかしたら、今回のテキストを見て、

「こんなに覚えなきゃならないのかよ・・・！」

と、思うかもしれません。

というか、最近の、スケールやら key やらコードやらの内容で、
とくにそう感じているかも知れませんが。笑

僕自身も学生の頃、新しいことを覚えれば覚えるほど、
やらなきゃならない事が次々と見えてきて、唖然とした記憶があります。

でも、続けていたら、いつの間にか頭に入っていました。

いつも言っていることですが、焦らずひとつずついきましょう。

必ず、「あの時頑張ってよかった」と思うときが来ますので。

ではやっていきましょう。

まず、『インターバルとは何なのか？』についてなんですが、これは、

『とある音と音の距離(どれだけ離れているのか?)を数字(とアルファベット)で表したもの』

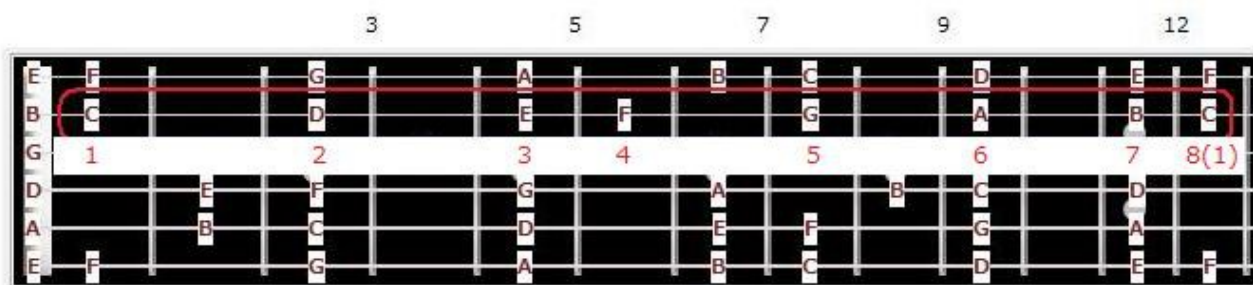
でしたね。

そもそも英単語としての「interval」の意味は、「間隔」や「合間」なので、
その単語を音楽では、「音と音の距離(間隔)」としているワケです。

vol.18 では、C メジャースケールを例に、インターバルの基本的な考え方を学びました。

その時の図をもう一度見てみましょう。

図、2 弦上で見ると、C メジャースケールとインターバル



見ての通り、ダイアトニックスケール(7音構成のスケール)である、Cメジャースケールの各構成音に、1~7までの数字を振っていますね。

トニックであるC音の”1オクターブ上のC音”まできたら、そのC音は8番目の音とも言えるし、また1番目に戻った、とも言えます。

これはどちらでも捉えられるようにしてください。

さて、おそらくあなたは、今まで使ってきたスコアやコード表などで、「#9」とか、「b5」といった表記を見たことがあるかと思います。

正直なところ、結構な頻度で出てくるはずですが、理論を学んでいない人の場合、そう書かれていても、さっぱり意味がわからないでしょう。

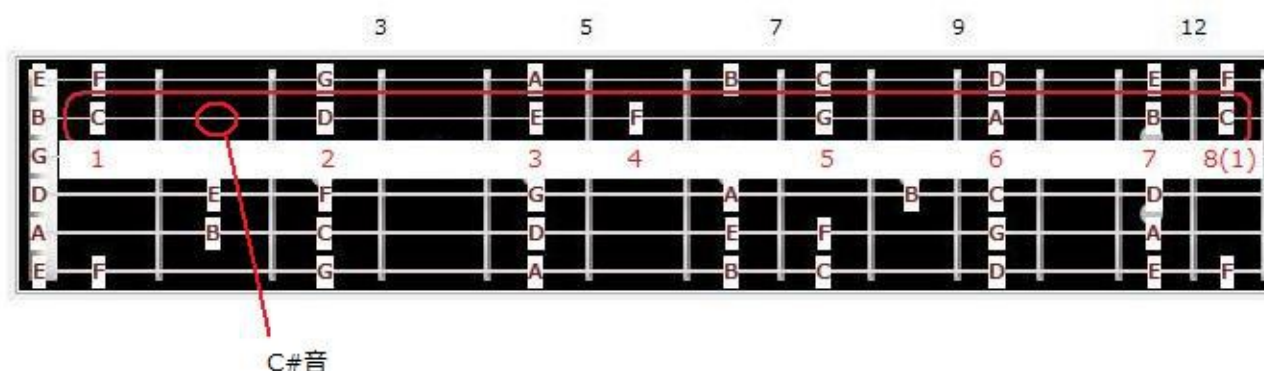
今回はその辺りの詳しい解説ですね。

基本的には単純な事ですので。

ではまず、そもそもとして、「#」は、その記号が付いている音を半音上げる表記ですね。

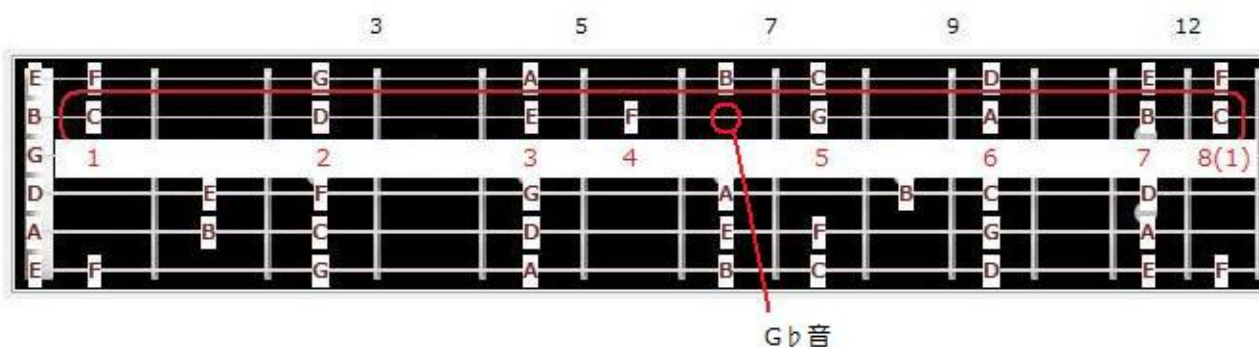
「C#」だったら、C音を半音上げる、ということです。

さっきの図なら、2弦1フレットC音の半音上の音になりますね。



逆に、「b」は、その記号が付いている音を、半音下げる事を示しています。

例えば「G ♭」ならば、先ほどと同じ図で言うと、2 弦 7 フレットの音になるわけです。



と、これらの＃と♭の基本的な意味を再確認したところで、インターバルの数字の話に戻しましょう。

今回も例に挙げられているのは、皆さんおなじみ、最も構成を理解しやすいであろう、C メジャースケールですね。

vol.18 で学んだ、C メジャースケールの各構成音に、インターバル的な数字の呼び方をつけるとこうでした。

まず、CDEFGAB の順に 1234567 です。

そして次に、音楽用語としての、1234567 の各数字の本来の呼び方はこのようになっていましたね。

※C メジャースケールの場合

1、C 音→『トニック』、『1st(ファースト)』(コードの場合は root と呼ぶ)

2、D 音→『2nd(セカンド)』

3、E 音→『3rd(サード)』

4、F 音→『4th(フォース)』

5、G 音→『5th(フィフス)』

6、A 音→『6th(シックス)』

7、B 音→『7th(セブンス)』

※8、C 音→『オクターブ(or トニック or 1st)』

見ての通りで、数字の呼び方は英語のそれですね。

じゃあ先ほど出てきた様な『♭ 5』などの表記。

これをどう捉えたらよいのか？

先ほど「#は半音上げる」「bは半音下げる」とお話ししましたね。

色々と説明してきましたが、ここまでの内容を全て理解できているならば、きっとあなたはこの質問に答えられるはずです。

『CメジャースケールのトニックであるC音から見て、「b5」にあたる音名を答えよ』

と。

CメジャースケールのトニックはC音。

Cメジャースケールの5番目の音はG音。

C音から見て5番目の音であるG音は5thと呼ぶ。

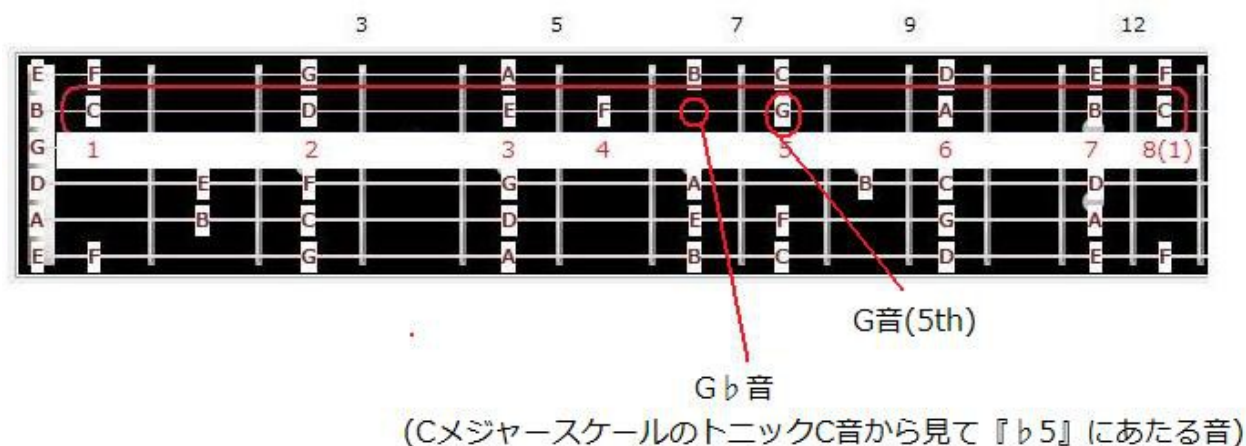
「b」の表記はその音を半音下げること。

ならばトニックであるC音から見た『b5』とは・・・。

と、こういうことです。

もうわかりますよね？

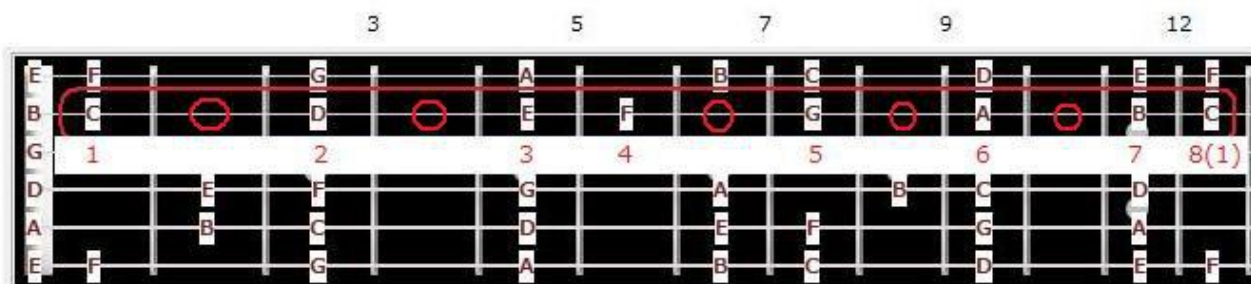
CメジャースケールのトニックであるC音から見て、「b5」にあたる音は「G $\flat$ 音」です。



このように「 $\flat$ 」とか「 $\sharp$ 」などの一見わかりにくい表記も、
こういった基本のインターバルから半音上下させただけのものです。

と、ここまでが前置きなんです(長かったですね笑)、
もう一度、今回のサンプルである、2弦上のCメジャースケールの図を見てみましょう。

Cメジャースケールの構成音の7音の左右には、大方、1フレット分のスキマがありますね。



赤丸の部分がスキマ

Cメジャースケールの構成音を基準として、1234567の番号を振った場合、
 $\sharp$ や $\flat$ がつく音は、さっきの「 $\flat 5$ 」の例のように、大体、この赤丸の場所の音になりますよね？

C音がトニックのスケールの「 $\sharp 5$ 」にあたる音と言ったら、2弦9フレットのG $\sharp$ 音になるわけです。

と、言うことで、これらの概念を踏まえた上で、
今回の本題、『インターバルの正式な呼び方』を学んでいきましょう。

具体的には、さっき復習した vol.18 の、

※Cメジャースケールの場合

- 1、C音→『トニック』、『1st(ファースト)』(コードの場合は root と呼ぶ)
- 2、D音→『2nd(セカンド)』
- 3、E音→『3rd(サード)』
- 4、F音→『4th(フォース)』
- 5、G音→『5th(フィフス)』
- 6、A音→『6th(シックス)』
- 7、B音→『7th(セブンス)』

※8、C音→『オクターブ(or トニック or 1st)』

↑この正確な呼び方を覚える、と言う事になります。

インターバルには、1～7(8)までの通常のもの、さらにその上のテンション(9th、11th、13th 等)がありますが、今回は1～7(8)までの数え方、テンションは次回、と2回に分けます。

量が多いとワケがわからなくなりますからね。

いつもの事ですが、相変わらずCメジャースケールを例にしていることは、常に頭において置いてください。

音楽理論的にもメジャースケールは全ての基準であり、なにを解説するにしても、最も理解しやすいものです。

ではいきましょう。

まず、Cメジャースケールの1番目、C音ですが、これは変わりません。

スケールやコードの基準となる第1音として、スケールならば『トニック』もしくは『1st』です。

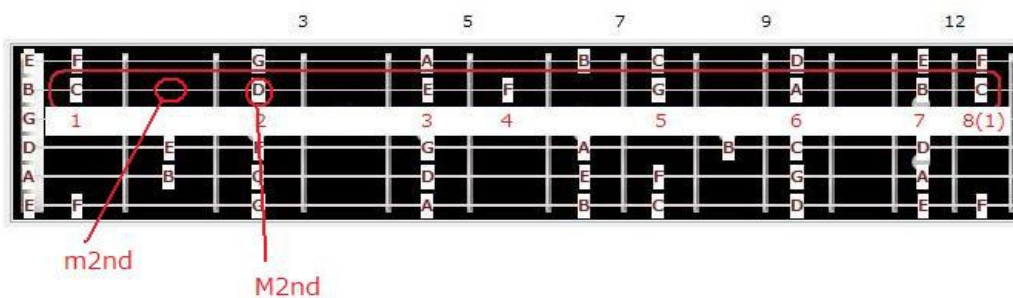
※コードならば『ルート』(もしくは1stと見ても問題なし)

次に第2音、(CメジャースケールならD音)

これは、2種類あります。

トニックの半音上の音が『m2nd(マイナーセカンド)』
トニックの全音上(1音上)の音が『M2nd(メジャーセカンド)』

と、インターバル的にはこのように呼びます。



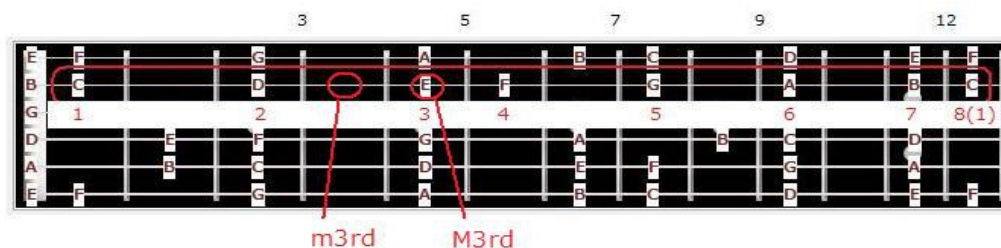
次に第3音。

これも2種類。

トニックの1.5音上(3フレット上)の音が『m3rd(マイナーサード)』

トニックの2全音(4フレット上)の音が『M3rd(メジャーサード)』

これは以前、2種類の3rdの把握でやったので、理解しやすいかと思います。



次の第4音。

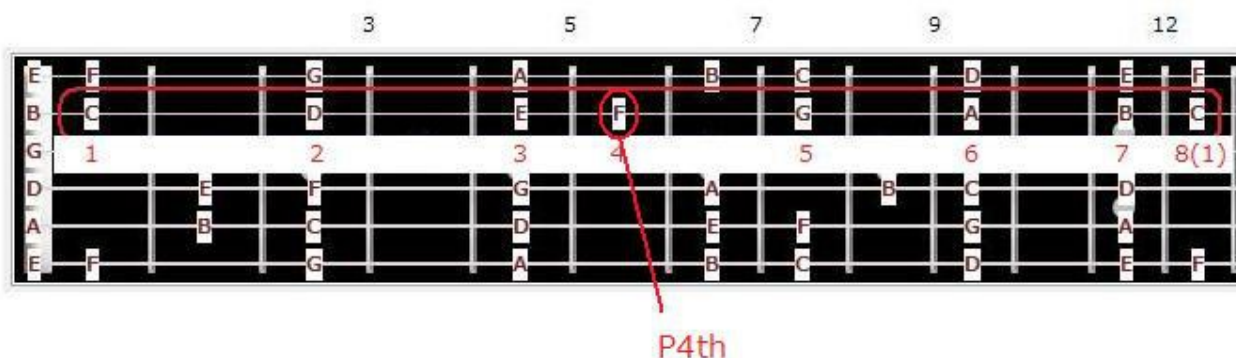
この第4音はテンションとしては11thにあたる音です。

(※意味がわからなかったら vol.18 を復習してください)

テンションである11thとして見る時は2種類を頻繁に見ますが、

第4音として見る時は、(一定以上、複雑な音楽でなければ)大方、1種類だけです。

トニックの2.5全音上(5フレット上)の音が『P4th(パーフェクトフォース)』



さて、新しい用語として、『パーフェクト～』というものが出てきましたね。

これについてざっくり説明すると、トニックの音とその音の音波の周波数比率を対比した時、特に単純な数字になる(1:1、1:2、2:3、3:4 など)ものに『パーフェクト(P)』の文字がつきます。

まあ、普通に音楽を楽しむ分には、呼び方さえわかっているれば、この辺りの理由は別に覚えていなくても構いません。

ただ、もう少しだけ説明すると、2つの音の音波の周波数比が整っていれば整っているほど、その2音を同時に鳴らしたとき、綺麗に響くよね、ってことです。

逆に、2つの音波の周波数が整っていなければ整っていないほど、その2音を同時に鳴らすと、綺麗に響かない、となるわけです。
(※と、西洋音楽では考えられてきたようです)

だから『パーフェクト』。この程度の解釈で十分ですので。

(※ちなみに1度(1st)も、全く同じ音程の2つの音の距離(例えば同じ高さのCとC)を、『完全1度(P1st)』の音程と呼びます。ですがこれについては『ユニゾン』の呼びの方が馴染みがあるかもしれませんね)

では、次にいきましょう。

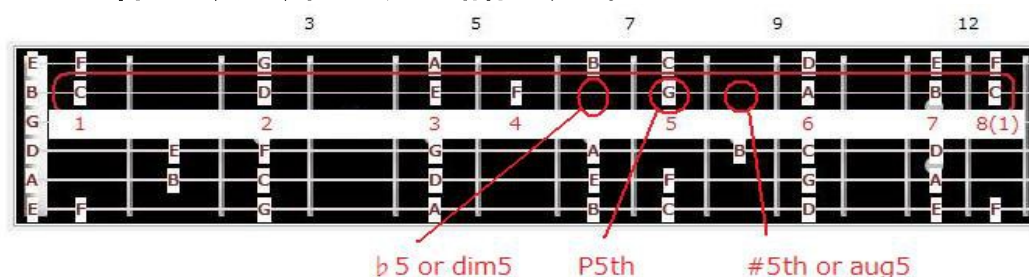
第5音。これは3種類が良く出てきます。

まずは基準の『P5th(パーフェクトフィフス)』。
トニックの3.5全音上(7フレット上)の音です。

そしてその左右(音程的には上下)に、『b5』と『#5』。

『b5』の事を、もう1つの呼び方(捉え方)として『dim5th(ディミニッシュドフィフス)』
『#5』の事を、もう1つの呼び方(捉え方)として『aug5th(オーギュメントドフィフス)』

どちらかと言えば、b5、#5の方が略称ですね。



コード表記としては、例えば『Cdim(C ディミニッシュ)』や
『Caug(C オーギュメント)』というモノがありますよね。

これは、本来のCのトライアド、C、E、GのP5thである、G音を半音動かしたコードになります。

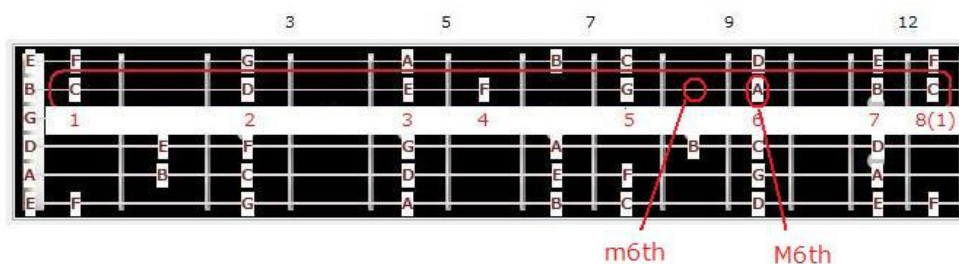
なので『Cdim』のコードならば構成音は C、E、G $\flat$ 、
『Caug』のコードならば、構成音は C、E、G $\sharp$ となります。

(※実は 4th にも aug と dim の音程がありますが、そこまで出てこないと思うので、それについては頭の片隅にでも置いて下さい)

第 6 音にいきましょう。

第 6 音は 2 種類。

トニックの 4 全音上(8 フレット上)の音が『m6th(マイナーシックス)』
トニックの 4.5 全音上(9 フレット上)の音が『M6th(メジャーシックス)』
となります。



さて、ここで湧き上がるであろう疑問として、
『 $\sharp$ 5(aug5th)と m6th って同じ音じゃね?』ということがあると思います。

これについては、『5th 側から見るか、6th 側から見るか』によって
同じ音でも捉え方が変わるんですね。

この内容は、どちらかというとスケールとコードに関係した話になるので、
とりあえず今は、両方の見方で捉えられるようにしておいてください。

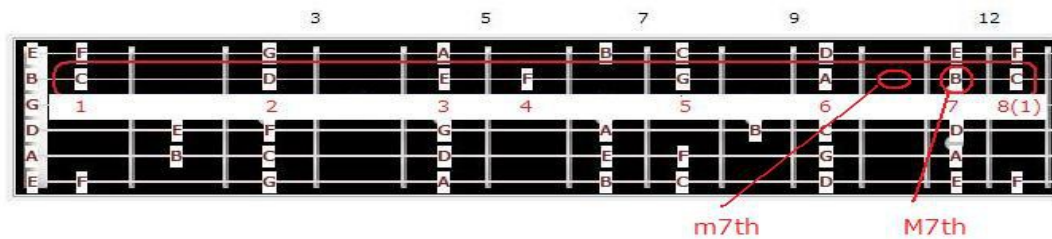
最後に第 7 音。

これも 2 種類です。

トニックの 5 全音上(10 フレット上)の音を、
『m7th(マイナーセブンス)、もしくは $\flat$ 7th(フラットセブンス)』

トニックの 5.5 全音上(11 フレット上)の音を『M7th(メジャーセブンス)』

と、呼びます。



これについては、今知っている 7th コードを確認してみるとよくわかると思います。

例えば CM7 ならば M7th である B 音が、Cm7 もしくは C7 等であれば、m7th である B $\flat$ 音が含まれているはずですよ。

この辺り、高い音になればなるほど、『トニックから何音下か？』で数えた方が見やすくなってきたりもしますが。

(※M7th はトニックの半音下、m7th は全音下の音、の様な感じで)

さて、結構なボリュームになりましたが、今回は以上です。

これらの、インターバル把握の練習法としては、まずやる事として、今回やったような『1 本の弦の上で確認する』と言うのが基本でしょう。

要するに、トニックの場所(音)を決めて、1 音ずつ、音名とインターバル名を言いながら弾いていきます。

C トニックで見るならば、

『C、トニック、D $\flat$ 、マイナーセカンド、D、メジャーセカンド・・・』

と言ったような感じで。

一見バカみたいに思えるかも知れませんが、この練習が一番効きます。笑

ある程度、継続してやってみてくださいね。

で、この 1 本弦上での確認を「横の確認」とするならば、次に行うのは「縦」の確認です。

適当なトリックとスケールポジションを選び(最初は C メジャースケール推奨)、
同じように音名とインターバル名を確認しながら、1 音ずつ弾いていく、と。

この辺りを理解しておく、チャームードの各ダイアトリックスケールの意味(と言うか構造)だったり、B7(♭9, ♭13)のような、複雑なコードネームが表している事の意味がわかるようになってきます。

引き続き、詳しくやっていきますが、それらをしっかりと理解する為の基礎知識として、
今回のインターバルの把握が必須です。

頑張ってください。

では、また次回。

ありがとうございました。

大沼